

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第23回 酒井邦弥 神田外語大学第5代学長  
学生が成長する舞台を作るために



平成22（2010）年4月、神田外語大学の第5代学長にみずほホールディングス元副社長の酒井邦弥氏が就任しました。かつて第一勧業銀行専務取締役を務め、3つの銀行がみずほ銀行へと合併した時には最高責任者として交渉の矢面に立った人物です。酒井学長の就任後、神田外語大学は、他大学との連携、企業との連携、そして語学ボランティアなど学外との関係強化に力を入れていきます。異文化との関わりを原体験に持ちながら、銀行マンを経て、神田外語大学の学生に「舞台」を作るために情熱をかけるに至った物語をお聞きました。（構成・文：山口剛／文中敬称略）

僕は中国の北京生まれです。東京で暮らしていた両親が貿易の仕事で北京に渡り、太平洋戦争が終戦する前年の昭和19（1944）年5月に僕が生まれました。中国から引き揚げて来たのは終戦の2年後。上陸用舟艇という兵士を輸送していた船で長崎の佐世保港に到着しました。

日本に来てからは母の実家があった東京の目黒で暮らしていました。両親はとても苦労したようです。引揚者は全財産を現地に置いてくるわけですから当然です。僕も小学校の頃は、「おまえの父ちゃん、支那人だ」と言われ、ずいぶんといじめられました。「引揚者」という言葉の響きも嫌いだった。かなり複雑な思いを抱えた少年時代でしたね。

体が弱くて、朝礼の時に倒れてしまうような虚弱児童でした。健康に自信がないから、自己肯定もできない。鬱々としていました。でも、高校生になってバレーボール部に入ると、身長がぐっと伸びた。体力もついて、物事を肯定的に捉えられるようになっていきました。いつも泣かされていたのに、もう喧嘩をしても負けませんからね。人生観、それで変わったと思います。





ずっと本を読むのが好きだったから、時間があると図書館に行っていました。次第にドイツ文化に憧れるようになりました。イギリスやアメリカではなく、やはりドイツ。敗戦国であり、ヒトラーを体験した国。これは面白いなと。ドイツ観念哲学に憧れ、音楽や芸術に憧れた。高校卒業後は、東京外国語大学のドイツ語学科に進みました。

東京外語大には必ず参加しなければならない課外活動として「語劇祭」があります。すべての学科の学生が参加して、学んでいる言語で劇を上演する。2年生か3年生の時にやるんですが、僕たちは、ゲーテの『ファウスト』をやろうじゃないかとなった。そして、先輩から「お前がファウストをやれ」と言われました。セリフは膨大な量のドイツ語です。夏休み中をかけて稽古をする。すさまじいエネルギーをかけたんですが、おかげでセリフは今でも覚えています。

外国語は本で読んだり、書いたりするだけじゃ学べない。劇を通じて外国語を体で体験する。背景にある文化を理解し、コミュニケーションをする。語劇祭には外国語学習の本質がありました。(1/7)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第23回 酒井邦弥 神田外語大学第5代学長  
学生が成長する舞台を作るために



積極的に舞台に立つことで、  
人生は大きく変わります

不思議なご縁ですが、当時、東京外国語大学の学長は小川芳男先生でした。英語教育の大家であり、後に神田外語大学の初代学長になられた方です。小川先生とは学食でカレーライスを食べながら話をした記憶があります。考えれば生意気な学生ですよ。

先生はよく「お前、ドイツ語ばかりやってちゃダメだぞ」とおっしゃっていました。僕が「えっ、どういう意味ですか？」と尋ねると、「文化や芸術、歴史。言葉の背景にあることをたくさん学ばなくちゃダメなんだ」とおっしゃるのです。まさに、その精神は神田外語大学の教育にも受け継がれていきました。

学生時代の大きな体験のもうひとつは昭和39（1964）年の東京オリンピックです。大学1年生の時だったから、ドイツ語もまだあまり上手じゃなかったけれど、代々木の選手村に行って、選手たちの買い物に付き合っ、通訳をしました。

当時、ドイツは東西に分かれていました。東京オリンピックの時に初めて統一選手団を作った。選手たちは東も西も、区別や差別なく付き合っている。オリンピックが終わったらまた別の国になるけれど、そんなの関係ありません。やっぱり人間っていいなあと思ったし、東西を隔てる壁なんて関係ないんだと感じました。



国際スポーツ大会でのボランティアと外国語大学の学びには親和性がすごくある。人間には喜びを感じるときが大きく3つあります。まず、他者から認められたとき。次に人とつながったとき。そして、人に貢献できたときです。この3つです。スポーツボランティアであれば、自分の専攻言語で外国人と交流して、人の役に立てる。なんとも言えない喜びです。ぜひ、神田外語大学の学生にも体験させたい。できれば世界規模の大会で。世界観が広がりますよ。

スポーツの世界大会で外国語を使ってボランティアをすること。それは、与えられた「舞台」なんです。演劇と同じです。舞台に立つということが、若者にはとても大切です。積極的に舞台に立つ経験をしていくことで、人生は大きく変わりますからね。

卒業後は第一銀行に就職しました。僕の専攻だと、ドイツの得意とする精密機器メーカーが就職先として多いのですが、メーカーの仕事だと僕は飽きちゃう、絶対に。色んなことをやれる会社といえば銀行か商社です。第一銀行の面接に行ったら、最初は「ドイツ語専攻は採用しない」と言われたのですが、後日、「2、3年後にはドイツ支店を作るみたいだから、うちに来い」と言われ、採用になりました。ただ、僕は主には労働畑に進み、ドイツに赴任することはありませんでした。人事担当として世界中に出張しましたが、ドイツへの出張は退職する前の2泊3日のみ。仕事ではドイツとの縁はありませんでしたね。(27)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第23回 酒井邦弥 神田外語大学第5代学長  
学生が成長する舞台を作るために



### 「おまえ、よく怒られるよな」と 佐野会長にはよく笑われました

第一銀行に入社して最初に配属されたのは神田支店です。取引先のひとつに佐野学園がありました。当時は、神田外語学院の学生の数がものすごい勢いで伸びていた時期です。

僕が任されていたのは単純な集金業務です。学校や個人のお金を預かって銀行に持ち帰るだけですが、よく間違えてしまった。それで、佐野きく枝先生（当時、神田外語学院副学院長）にはいつも怒られました。すごく厳しい人だった。佐野隆治会長（当時、事務長）には「おまえ、よく怒られるよな」と笑われていましたね。

きく枝先生は教育、特に若い人へのしつけに厳しい方でした。学生に対しても、きちんとするよう指導していました。最近になって、きく枝先生を知る方と話をすると「あんなに優しい方はいなかった」とみんな口を揃えて言うけれど、僕にはちょっと違った。それと、佐野公一先生（当時、佐野学園理事長・神田外語学院学院長）は、近寄りがたい雰囲気でした。とても迫力のある方でした。

そうやって神田外語学院へ集金で通っていた時に、佐野隆治会長に、「酒井くんはどこの大学出身なんだ」と聞かれました。「東京外語大です」と答えると、「外国語大学を出て銀行に入ったのか。珍しいな」と言われました。ご本人に確認したわけではないですが、そのやり取りが残っていて、その後のご縁につながったのかもしれない。



佐野会長とは、その後、ずいぶんとお会いしていない時期がありました。昭和62（1987）年4月に神田外語大学が開学して、その後、平成6（1994）年4月に福島のブリティッシュヒルズを開業しました。僕は銀行で人事の仕事をしていたのですが、佐野会長が久しぶりに訪ねてきてくれて、研修でブリティッシュヒルズを使ってくれないかと提案されたのです。当時は理事長でしたから、トップ自らが営業に回っていたんですね。

僕は32年間の銀行員生活で2回、他行との合併を経験しました。第一銀行と日本勧業銀行が合併して第一勧業銀行になり、第一勧業銀行・富士銀行・日本興業銀行の三行が合併してみずほ銀行になった。2回目の合併の時は第一勧業銀行の専務取締役で、調整業務の最高責任者でしたから、最終判断をしなければならなかった。対等の合併だからプライドがぶつかり合う。きつい仕事でしたね。

銀行によって使う言葉さえ違う。例えば、融資のことを、ある銀行では「貸出金」、別の銀行では「貸出」、また別の銀行では「貸金」と言う。そういった細かいことを、一つひとつ統一しなければならないのだから、これは大変です。（3/7）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第23回 酒井邦弥 神田外語大学第5代学長  
学生が成長する舞台を作るために



学長を依頼した佐野会長は、一言、  
「あんたなら、できるだろ」。それだけです。

銀行同士の合併の調整で大切なのは、相手方の銀行の「文化」には踏み込まないこと。それぞれの銀行には文化がある。文化を否定すると、態度が一気に硬化する。致命的です。とにかく理詰めの議論はしない。機が熟すのを待つ。そのうちに疲れて、「こだわらなくて、いいか……」となる。柿の実が落ちるのを待つわけですよ。

合併の仕事をやり終え、副社長を務めたみずほホールディングスを退職して、関連の不動産会社の役員になりました。2年ほど勤めた頃に、東京外国語大学の亀山郁夫学長から声がかかり、東京外国語大学の学外理事に就きました。

佐野隆治会長と再会したのは、東京外語大の理事をしていた頃です。「ちょっと大学を見に来ないか？」と声をかけていただき、千葉・幕張の神田外語大学を訪問しました。7号館が完成したばかりの頃です。とにかく驚きましたね。英語学習の自主学習センターのSALC。アジアや太平洋の多言語を学ぶ施設のMULC。どれも、個性的な建物でコンセプトが明快です。佐野会長は「これからは、こういった施設を目玉にしていきたいんだよ」と語っていました。



学校というのは「装置産業」の側面があります。学生が学ぶ施設そのもので教育理念を表現できなくちゃいけない。佐野会長がすごいのは、そこです。神田外語大学は施設を見れば、どんな教育が受けられるかが分かる。新聞広告なんて要らない。佐野会長はどこにお金をかけるべきかを分かっている人ですよ。

佐野会長は本気で人を育てることを考えている人。佐野会長を事業家だと言う人もいるけど、僕は生まれながらの教育者だと思います。人が好きで、若者が好きな人。人を育てるために本質を貫き、狭き険しき道を歩んでいく人です。

大学を見学し終わると、佐野会長は僕に「学長をやってくれないか」とおっしゃった。僕はさすがに驚いて、「待ってください。東京外語大で理事はやってますが、学長は違う。教育の素人じゃ無理です」とお答えしました。

神田外語大学は、初代学長が小川芳男先生。2代は言語学の大家の井上和子先生。3代はアジアの言語と文化に精通された石井米雄先生。そして、前任の4代は外交官として活躍された赤澤正人さん。そこに銀行出身の僕なんかが入ったら、教員は反発するはずですよ。

私立大学は学校法人の理事会が舵取りをしていくにせよ、現場は絶対に受け入れてくれない。僕に学長は無理だと思いました。でも、佐野会長は、一言、「あんたなら、できるだろ」。それだけです。(4/7)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第23回 酒井邦弥 神田外語大学第5代学長  
学生が成長する舞台を作るために



自分のこれまでの人生を投入すれば、  
学生たちを幸せにできるかもしれない

さすがに即答はできませんでした。でも、考えている期間に大学を訪れて、学生たちの顔を見ているうちに気持ちが少しずつ変わっていった。なんか、温かくなってきたんですよ。

僕は銀行の仕事で疲れ果てて、燃え尽き症候群になった。でも、神田外語大学の学生たちの顔を見ていると、心が温かくなって、自分のこれまでの人生を投入すれば、こいつらを幸せにできるかもしれない。そう思い始めた。学生たちの人生に関わって、幸せにしたいと思えた。他人の評価は別として、自分ができることはすべてやる。神田外語大学の学長をお引き受けしました。

学長をお引き受けした直後に、偶然、石井米雄先生に会いました。石井先生は「酒井さん、聞いたよ。神田の学長やるんだってな？」とおっしゃったので、「僕なんかにできるんですかね」とお答えしました。すると、「大丈夫だよ。神田は大丈夫だ。教員も職員も優秀だから」と太鼓判を押してくれました。実際、学長になってみると、職員たちは佐野会長に鍛えられ、そのDNAを受け継いでいるし、教員も言葉の背景にある文化を教える意味を理解し、教育を実践していました。

平成22（2010）年4月に学長になって、最初の年度が終わろうとした平成23（2011）年3月11日、東日本大震災が起きました。現地にボランティアが入って瓦礫を片付ける映像が連日報道される。学生たちからも何かしたいという声がありました。



僕は佐野元泰理事長と会ってこう話しました。「うちの学生が炊き出しをする必要はないと思います。被災地には、学校がない地域があり、教員が足りない学校があります。教育復興ボランティアのほうが、うちの大学には合っていると思います」。そこから始まったのが「東日本大震災復興教育ボランティア」であり、それは今でも続いています。

被災地の学校に行って英語を教える。学生たちにとっては、本当にかげがえのない体験になる。教室では学べないことを学び、感受性の強い若者たちはその経験でどんどん変わっていく。

ボランティアに参加している学生たちを見て、神田外語グループの学生ってすごいなと思いますね。学生たちは「やってよかった」「あの体験がなければ今の自分はないです」と話してくれる。やっぱり若さはいい。僕らの想像を超えている。僕らは、こういった仕掛けをどんどん作っていかなくちゃいけない。人のために役立つ喜びは、何にも代えがたいものがあるんです。(5/7)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第23回 酒井邦弥 神田外語大学第5代学長  
学生が成長する舞台を作るために



溜まり場があり、人との出会いがあるから、  
そこから素晴らしい人間が育っていく

私が学長を務めていた時代に、いくつか大学との大学間連携の協定を結びました。ひとりの人間を育てるには網羅すべき教育の領域がありますが、すべての領域の施設やカリキュラムを完璧には揃えられません。それに、すべてを自前でやるのは経営的に不可能です。大学同士がそれぞれの特長を生かして補完し合う意味では、僕は大学連携が絶対に必要だと思えますね。



神田外語大学がある千葉・幕張新都心には数多くの企業が集まっています。代表する企業のひとつにイオンがあり、平成25（2013）年6月に神田外語大学とイオングループは産学連携のパートナーシップに関する協定を締結しました。イオンは東南アジアで事業展開をしていますから、現地で活躍できる人材を育成したいし、国内で採用した留学生の教育も行いたい。様々な部分で協力をし合えます。単に学生の就職先を確保するために結んだ締結ではありません。お互いにこの幕張という土地からは逃げられません。だからこそ、焦らず、腰を据えて連携を深めていけばよいと思います。

被災地でも、スポーツ大会でも、国際会議でも、ボランティアをするというのは舞台に立つこと。そして、それは自分自身の居場所を作ることでもあります。僕は学生に「社会に出たら自分の居場所がなくなるよ」とよく言います。会社はこれまでのようなファミリー的な要素がなくなるし、家庭や地域でも関係を作るのは難しい時代。僕は卒業した大学が社会人にとっても居場所になるべきだと思う。「いつでも帰ってらっしゃい」と言いたいですね。



神田外語大学のよい所は自分の居場所を見つけられることです。例えば、MULCは、各言語を学ぶ学生の部室だと思ってほしい。いつでも来ていいし、そこにいて先輩、後輩、留学生が来る。話しているだけで勉強になる。そんな場所のある大学なんて、他の大学にはないんじゃないかな。溜まり場があって、人との出会いがあるからこそ、そこから素晴らしい人間が育っていくんです。

そういったつながりがアジアに広がる同窓会として機能する。海外からの留学生も一緒になってネットワークが生まれていく。僕もベトナムのホーチミンで開かれた同窓会に参加したけど、それは素晴らしい光景でしたね。(6/7)

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第23回 酒井邦弥 神田外語大学第5代学長  
学生が成長する舞台を作るために



あなたの大学なんだから、  
いつでも帰ってくればいい

世界は今、大きく激動しています。アラブの春でイスラムの国々の民主化が進んだと思えば、内戦が激化した。イギリスがEUを離脱して、ドナルド・トランプが大統領になった。人々は反グローバル主義や格差社会の進行を危惧している。けれど、本当の問題は資本主義や民主主義に限界が来ていることだと僕は思います。学生たちは、そんな時代を生きていかなくちゃいけない。

難しい時代だからこそ、人と人の交流、異文化理解、異文化交流が重要性を増すのです。我々は平和の礎はコミュニケーションだと心底信じて、腹をくくるしかない。平和の礎を築くことはたやすくはない。願っていても築かれはしない。じゃあ、そのために何をやるんだ？それが問われる時代になると思います。

僕は今こそ日本だと思います。絶対に日本の考え方が必要とされるはず。こんなに安全な国は他にないし、こんなに成熟した国民も他にない。人間にはあるべき姿がある。それを日本が発信していかなくちゃいけないと思います。

神田外語大学の学生たちは、日本で、世界で、がんばっていくことでしょう。だからこそ僕は、大学が卒業生の居場所になるべきだと思う。卒業して何年経っても、「あなたの大学なんだから、いつでも帰ってくればいい」と僕は言いたい。



卒業生は数年ごとに職場を変え、キャリアアップをしていくでしょう。僕は、職場能力ではなく、職業能力をつけるべきだと学生に指導しています。会社が変わっても通用する能力。外国語と文化理解の能力はその最たるもの。だから、学び直しが必要だと思ったら神田外語に帰ってくればいい。それだけじゃない。神田外語は帰ってきてほっとする場所であり、誰かに泣く場所であってほしい。

振り返ってみれば、神田外語グループとの運命的としか呼べない縁でつながってきました。結局、こうやって神田外語大学に自分の居場所を見つけて、学生たちに追い風を吹かせることに生きがいを感じられたのなら、銀行員なんかにならずに、まっすぐ教育界に来るという道もあったかもしれません。そのことを佐野会長にお伝えしたら、「銀行時代があるから、今があるんじゃないですか」と正されました。まったくその通りです。また、本質を言われました。

色々としんどいことはあったけど、人生はやっぱりなかなかのものですよ。(77)

#### 酒井 邦弥（さかいくにや）

昭和19（1944）年5月、中国・北京生まれ。昭和43（1968）年3月、東京外国語大学ドイツ語学科卒業。同年4月第一銀行入社。平成11（1999）年第一勧業銀行専務取締役。平成12（2000）年みずほホールディングス副社長。東京外国語大学理事を経て、平成22（2010）年4月神田外語大学第5代学長に就任。趣味はクラシック音楽の鑑賞で、後期口マン派音楽をこよなく愛している。